第二十二卷　第一號　六二

我が國土觀の變遷

內田秀雄

一

上代のひと〴〵が我が國土を如何に認識してゐたかは之を明かに知ることが出來ない。たゞ、われわれは紀記その他に現はれたるわが國號に就いて若干の地理的考察をなし得るに過ぎない。

古事記にみゆる大八州國が何處の島を指し、何を意味するかは諸說のある所であるが、要はわが國を形成してゐる大小の島々を總稱したもので、日本群島の地形的な稱呼である。豐葦原中國、豐葦原千五百秋瑞穗國とは日本書紀に見ゆる所であつて、葦原の解釋も宣長の「國號考」のやうに「海邊のこと〳〵に葦原」であつたことを反映したものであり、瑞穗國は說明するまでもなく、稔り豐な義であらう。これらは我が國の植物生育の盛んな國であることを物語つてゐるのである。從つて、間接的には氣候上より觀たるわが國土觀であるとも言ひ得る。大和、倭、耶麻土に關しても諸說があり、山跡說（釋紀、神皇正統記）山門說（眞淵、宣長）場所說（飯田武卿）ヤマト（アイヌ語チエンバレン、マトは高貴のムチ・ヤは接頭語・白鳥）などがあるが、とにかく、皇都大和が全日本の名稱とな

つたものである。日本も亦諸說紛々としてゐるが、日の出づる方にある國、卽ちヒノモトノクニで我が國より西方の朝鮮などで稱した言葉で、我が國より西方の支那を指して日の暮の國の意でクレノクニと言つたものに對應するもので、聖德太子の國書に書かれたる「日出處」に該當するものである。①從つてこの國號は我が國を大陸との位置の關係より觀察したものである。

この他に浦安國、細才千足國、秋津島、などの如き名稱もあるが、以上これらの國號は何れも國土の持つ地理的特徵の一部を代表して表現されたものであり、我が國土性の一面觀である。これらの名稱が必ずしも嚴密ではないが、並稱されてゐたと言ふことはかかる國土觀が存在したことで、從つて、これを綜合してみれば當代に於ける國土觀を推察することが出來るのである。卽ち『我が國は大陸の東方海中にある多くの島々よりなる國であり、島國であるがためにうら安の國であり、細才千足の國なる國防堅備の國柄で、氣候溫和、ことに植物の育生盛んに農作豐かなるよい國』と考へてよいのである。

これに依つて、明かなるが如く上代人の國土觀は良く我が國の眞相を觀察してをり、漠然とはしてゐるが、正しい國土觀を持つてゐたと言ふことが出來るのである。これ地理學に於いて謂ふところの島の保護性と、アジア大陸周邊の日本群島のアジア・モンスーン帶に於ける我が國の氣候狀態をその植物の成育の狀況に依つて說明してゐるのであつて簡單な地理學的日本觀であると言ふことが出來

る。

然るに、かかる正確な國土觀も、時代の降るに從つて却つて不明瞭となり、漠然となり、中世混沌の時代に入るのである。かかる變化の起つたのは何に由來するであらうか。謂ふまでもなく、これは外來思想(佛教思想)に影響されたものである、哲學的觀念に左右されてゐない時代には我が上代の人々はナイブな、肉眼で觀察した通りの比較的正鵠を得た國土觀を持してゐたのである。

二

中世は「法」を中心として社會の諸事象が生起廻轉してゐた時代である。[2] 從つて、我が國土觀も亦この影響を受け總てが佛教的に解釋された。この時代の歷史思想として所謂末法思想なるものがあるが、この末法思想の發展に伴なひ澆季混濁の時代を悲しむと共に、彼岸の世界を欣求し、この世を嫌ひ、彼土に往き生れんことを願ふ所の往生思想の發生をみるのであるが、この時間的な末法思想と相對立して、空間的には邊土思想とでも謂ふ可きものが生じた。この邊土思想とは言ふまでもなく、如來出世の地なる印度を中心として考へられたものであつて、これは又佛教の世界觀の一部分でもあるが、これが末法思想と結びついて我が國に於いて展開したのであつた。卽ち、印度や支那が大國であるに反し、我が國は「小國」であり、海中に散在せる島々はあたかも粟を播き散したが如き小島の群である「粟散國」であり、地理的に觀ても印度を遠ざかること遙かなる、如來の謦咳に接し得るはお

ろか、その教法すら聞き難き「邊土」であり、「邊州」であると考へるのである。時間的に末法思想に捕はれた人々が、事實三國中、印度に最も遠く、その國土も最小の我が國をかくの如く觀じたのも理由のないことではない。往生思想の愈々盛んとなるにつれて、一方根機に於ける罪惡觀の主張の傍證として、卽ち、三世の因果應報を說く佛說では、罪障深重の凡夫の生れるにふさはしき大地として我が國土が理解されたのである。(後述「耀天記」參照)

然らば、かかる國土觀の依つて來る所は何處にあるかと言へば、先づ「粟散國」の源流は「仁王經」に

一一須彌有二四天下一其南閻浮提有二十六大國、五百中國、十千小國、無量粟散國一

又「楞嚴經會解」には

粟散卽小國小主散二天下一如粟多也

などとあるに由來するものであるが、これらは必ずしも日本國と特定してはゐない(後述、萬國掌菓圖參照)。然るにこれが何時の頃よりか我國を指して稱するやうになつたのである。

次に「邊國」或は「邊土」「邊州」などと言ふのも「百一羯磨」などに現はれてゐる思想で、該書第五卷には、「東方に國あり、奔茶跋達那と名づく、城東遠からずして婆羅樹あり、奔茶各叉と名づく、此を東邊と謂ひ、茲より已去を名づけ邊國となす」などと說かれてあり、又「大智度論」には安陀羅舍婆羅(裸國)兜呿羅(小月氏)修利、安息、大秦等を弊生處卽ち邊國としてゐるが印度以外の地を

邊國と言ひ、特に前者では東方の地を特定して邊國と稱してゐる。④

さて、この「粟散片州」或は「邊土」「邊州」の文獻に現はれる最初は何であらうか、又何時頃から始まるものであるかを決定することは必ずしも困難なることではないのであるが、先づ最初に單に我が國を小國として自ら卑下してゐるものの二三例を擧げるならば、「とりかへばや物語」には中納言の才、小國に過ぎたりと言つてをり、又「松浦宮物語」にも「和國はつは物の國として、ちひさけれども神のまもりつよく人の心かしこかんなる」と述べ我が國がその面積狹少、到底、支那天竺に比すべきものでない、唯神明の加護あるがために諸外國に勝りてゐると考へてゐるのである。同樣の思想は「宇津保物語」にも觀られるのである。

次に粟散片州觀の現はれて來るのは流布本「平家物語」十一卷、先帝入水の項に

此國ハ粟散邊地ト申テ、心憂キ境ニ侍ヘバ、極樂淨土トテ目出タキ處ヘ具シ參ラセ侍フゾ

とか、同じく「源平盛衰記」五卷、澄憲賜血脈事の項に

就中國ハ粟散邊土也、時ハ濁世末代也、誠ニ非可輒

同じく六卷、小松殿敎訓父事の項に

流石我朝ハ邊鄙粟散ノ境ト申シナガラ、天照大神ノ御子孫國ノ主トシテ

或は「保元物語」新院御謀反露顯の項に

吾國邊地粟散ノ界トイヘドモ、神國タルニヨツテ

などとあり、いづれも我國を粟散邊地とみてゐるのである。たゞ、こゝに注意すべきは、流布本に前項所引の如き文句が用ひられてゐるが、屋代本、平家物語卷第六「新院崩御」の項にはこのやうな記載がないことである。卽ち

殿ヲ八長生ト准ヘ門ヲ不老ト事ヨセシニ十才ヲタニモ待タセ給ハス雲上ノ龍下テ海底ノ魚トソ成セ給フ國母モ連テ入セ給タリケル

これに關しては諸說あらんも、屋代本の流布本に比して、古い形式のものなることが推定される。③邊土思想の發展いまだしからざる時代の作品とみられ、流布本「平家物語」その他は、おごれる者の久しからざる盛者必滅の悲慘な思想の受け入れらるべき情勢にあつた頃の作品とみらるべきである。

かかる、末法觀、邊土觀は、淨土敎の極致にまで發展し、絕對他力の敎を說いた親鸞に於いて特に强く現はれてゐる。しば〳〵引例されるが如く、彼は特に「正像末和讃」を著して末法時代の衆生の救濟さるべき道は念佛の唯一道であることを主張し、有名な

正像の二時は終にき　如來の遺弟悲泣せよ

と絕叫してゐるが、それと共にこの世を穢土と觀じ、「苦惱の舊里」（嘆異抄）とし、從つて、我が國土の如きも取るに足らざる世界であると考へ、次の如くに表現してゐる。「高僧和讃」源空聖人の項に

善導源信すゝむとも　本師源空ひろめずば
片州濁世のともがらは　いかでか眞宗をさとらまし
粟散片州に誕生して　念佛宗をひろめしむ
衆生化度のためにとて　この土にたび〳〵きたらしむ

又「正信念佛偈」にも同樣のことを述べて

本師源空明佛教　憐愍善惡凡夫人
眞宗教證興片州　選擇本願弘惡世

と言つてゐるが、勿論、彼が我が國土を邊土視のみしてゐたのでなく、前述の「片州」も「惡世」に對應して用ひてゐるのであり、支那を「中夏」と稱してゐる場合は「日域」としてゐる。

印度西天之論家　中夏日域之高僧
顯大聖興世正意　（正信念佛偈）

又、延文四年、權律師慶祐が上宮王院の正本によつて書寫したもので、作者未詳（一說思圓上人作）の鎌倉時代の作と思はれる聖德太子讃にも⑤

救世觀音大菩薩　傳燈東方粟散王
恭敬禮拜スル時ゾ　人皆驚キ悟ヌル

と言つてゐる。

佛教史觀を以て名高き慈鎮慈圓和尚はその著「愚管抄」に末法思想を盛んに述べて「末代ザマ」「世ノスエ」「世ノ末ザマ」と感傷してゐるが、邊土觀とみらる可き字句は認められない。しかし彼の歌集なる「拾玉集」には明かにこの思想がみられる。

三國の言音異れりと雖も、片州の和字、他を攝するものか、道理の一揆中心に在り

我が國の國字を尊重してゐるのであり「日の本は神の國ときゝしよりいますが如く、賴むとをしれ」（風雅集）の如き國土觀を有してはゐるが、尙神の我が國を守護し給ふと言ふ意味で、國土そのものに就いては片州觀を出てゐないのである。

禪宗の諸師が、支那直入の方法で參禪してゐるに反して、日本語を用ひ日本的な禪宗の開祖として名高き道元の如きに於いても尙我が國土觀はこの時代のものと一般であつた。「正法眼藏隨聞記」に

末世邊土の佛法興隆は、閑居靜處をかまへ衣食等の外護にわずらひなく、衣食缺足して佛法修行せば、利益も廣かるべしと

などとあるに依つても窺はれる。

鎌倉時代中頃の作で、室町時代に增補されたものらしい「耀天記」には

夫日本國本ヨリ神國ト成テ國々里里ニ鎭守明神イカキヲナラベ、鳥居ヲ顯シテヲハシマス事、延喜式ニ定メ被載數

三千一百二十二所トゾ承ル、一萬三千七百餘座トモ申ス、夫ハ慥ノ說イマダ不承反、神々皆是本地ハ往古ノ如來、法身ノ大士也(中略)實ニ日本國ハ小國ニアリテモ小國ナレバ、出世成道ノ地ニモカナフマジ、小根薄善ノ人ノミ淺近鈍昧ノ族バカリ集ル所ナレバ、說法敎化ノ器ニモアタハズ

と我が國をけなしつけてゐる。こゝで興味あることは小國であるために「小根薄善の人のみ淺近鈍昧の族」のみ多きとする一種の唯物的地理學的思想を述べてゐる點である。かかる思想は我が國地理學思想史の上からみても甚だ注目すべきである。

日蓮は所謂日本主義的な主張をなし、彼岸よりも現實の社會、國土を主張し、我が日本國に議論の重心を置いたが彼にして尙中世的な國土觀を脫却することが出來なかつた。「神國王御書」には

我ガ日本國ハ一閻浮堤ノ內、月氏、漢土ニモ勝レ、八萬國ニモ超ヘタル國ゾカシ、其故ハ月氏ノ佛法ハ西域記等ニ被載候ハ但七千餘個國也、其ノ餘ハ皆外道ノ國也、(中略)此國(我が國、筆者)ハ月氏、漢土ニ對スレバ日本國ニ伊豆ノ大島ヲ對セルガ如シ、寺ヲ數フレバ漢土月氏ニモ雲泥過ギタリ

と言つてゐるが、之に依れば我が國は如何にも印度、支那に比較して小國である。けれども寺數も多く、佛法興隆せる故に三國第一であると言ふのである。國土の小なることが絕對なる佛法に依つて補はれてゐると考へてゐるのである。

以上は主として佛敎徒乃至それに類する人々の思想であるがために前述の如き國土觀が表はされて

ゐるのであるのは勿論であるけれども、遺憾ながら當時に於ける文化架擔者（Kulturträger）が僧侶であつたがために、我々は彼等以外に之を求めることが出來ないのである。從つて一方に偏してゐるやうであるが彼等の國土觀を以てこの時代の國土觀としなければならないのである。たゞ我々が茲に特筆大書してこれを述べなければならないのは、かかる時代に生活しながら、時流を超越した一大卓見を持してゐた南朝の大忠臣、北畠親房卿である。彼の國體觀の卓越性に關しては今更茲に一言をだに加へる必要はないのであるが、「大日本者神國也」として「神明の皇統を傳へ給へる國也」と言ふ神國の眞の意義を明かにして國體學の史上空前の境地を開拓しただけあつて、その歴史觀、國土觀に優れたるものがあつた。內典の研鑽を積み彼は後世佛に佞せりとさへ難ぜられてゐる位であるが、決して內典に淫してゐないのである。當時の末法思想や澆季說にとらはれることなく「代下れりとて自ら賤むべからず。天地の初は今日を初とする理あり」（神皇正統記）とし、その國土に關して次の如く述べてゐる。

異國には此國を東夷とす。此國より又彼國をも西蕃と言へるがごとし（神皇正統記）

と一言よく內外の別を明かにし、日本、支那、印度の相互の位置、大小に關しては

日本は彼土をはなれて海中にあり、北嶺の傳敎大師、南都の護命僧正は中洲也としるされたり（中略）されば此國は天竺よりも、震旦よりも、東北の大海の中にあり、別洲にして神明の皇統を傳給へる國なり（同上）

と述べて、我が國の印度、支那の二國とその種類を異にしてゐることを主張してゐる。勿論、非難されたが如く彼も佛教學者であり、時代の子であるがために、尙若干は「天竺は正中によれり」とか「贍部の中國とす」とか、印度中心思想にかぶれてゐるが、しかし、支那を例證として「震旦ひろしと言へども、五天竺にならぶれば、一邊の小國なり」(神皇正統記)として、その言外に我が國の小國として恥しからぬことを主張してゐるのである。

我が國土觀の端的表現としては何を措いても地圖に之を求む可きであらう。地圖は地的知識の總和であるからである。然らば我が國の地圖の源流を何處に求むべきであらうか。これに關しても必しも尙明瞭にされてゐないやうであるが、世に謂ふ所の行基圖なるものが最古のもののやうで、これは拾芥抄に記載されており、慶長年間に初めて活字版となつたもので、行基菩薩の作と傳へらるゝものである。[6] 一枚圖として出版されたのは慶安四年の「日本國之圖」(京都帝國大學圖書館藏)と稱するものも我國最古の刊行地圖で、これも行基圖に基けるものである。[7] これらの地圖が近世以前の作なることは明かであるが、この地圖には我が國の形狀を略描寫してをり、その說明も簡單であるが、我が國土性に就いて中世風な說明を加へてゐるのである。

大日本國圖行基菩薩所圖也、此土形如獨鈷頭、仍佛法滋盛也、其形如寶形、故有金銀銅鐵等珍寶、五穀豐稔也(下略)

流石地圖に表現されてゐるだけあつて、我が國の表現方法が粟散片州の如き漠然としたものでなく、

甚だ具體的となつてゐるが、こゝに現はれてゐる思想は勿論佛敎思想であつて、國土の佛敎的解釋である。獨鈷とは謂ふまでもなく金剛杵の一股よりなるものであつて、大日如來の獨一法界の智を表示するものであるから、法界を統攝する絕對の極致を示したものであるから、その獨鈷の形狀よりして、我が國は又佛敎の最も興隆する所であると觀じ、その形が寶珠の如きであるために、あたかも摩尼寶珠があらゆる寶物を作り出すが如く、我が國もその寶珠の形に類似するが故に金、銀、銅の寶を產し、五穀豐稔であるとしてゐるのである。我が國土の略獨鈷にその形狀の類似してゐるのは認め得るが、寶珠と似てゐるとは思へぬが、尙形狀よりしてかゝる國土觀を表現してゐるのであつて、佛敎上より觀たる國土觀としては光明的方面より眺めたもので、彼の同じ佛敎でも淨土敎的方面よりの觀方に比して明るい觀方であると言ふことが出來る。しかし、これとてもその根本に橫たはれるものは大日如來の威德であつて、その威德に依つて辛じて我が國の國土が價値づけられてゐるのである。

室町時代の幸若舞の「日本記」はこの時代の文學としては珍らしく我が國土を謳歌してゐるものとし、[8]「國民としての誇を示すものである」[9]とされてゐるが、これも、この地圖と同じく大日如來の顯現の國としてその價値を認められてゐるに過ざないのである。

（上略）ゐいにちのほうのそのうへに、いてきはじめし國なれば、大日本國とは申すなり、日本國の淡路島、けしのせいに出來て、天竺もひらけり、さてたいとうもはしまれり、さしもにひろきてんちくこく、月をかたとる國

なれば、月氏國とは申す也、たうともひろしと申せとも、しんたくこくと名付つゝ、星をかたとる國にて有、日本我朝は、小國なりとは申せともしついきと名つけつゝ、日をかたとれる國にて、さんこく一の我朝に、心のまゝの壽命にてながくさかふる目出さよ

地圖に現はれたる粟散片州觀としては、時代はずつと降り近世に入るが、佛教家の地圖として、その流布も中々に廣く興味あるものに寶永七年庚寅發行にかゝる「南瞻部州萬國掌菓之圖」がある。掌菓之圖と言ふのはその序文にある如く、人趣の業無邊なるに依つて、世界も亦邊涯がない。けれども慧眼を以て觀ずれば大千世界と雖も「如掌中羅菓」とあるに依り、佛教的世界觀であるが、この圖は玄奘三藏の西域記や、漢書西域傳或は法顯の佛國記などと利瑪竇などの西洋の新知識をも利用してゐるやうであるが尙我が國を目して次の如くに說明してゐる。

猶未極於海外朝鮮、日本、琉球暹羅呱哇國等粟散群州其歟能及乎

この圖は印度を中心として、日本を行基圖に從つて、大陸の東邊に描寫したもので、これに依れば我が國は南方の諸島と共に如何にも天竺に比ぶれば粟散諸國としか觀られないのである。時代は降つてはゐるが、この圖は尙中世的なものであると言ふことが出來るのである。

然し、如何に中世が國土觀に於いて暗黑であり、悲觀的であり、混沌的であつたとしても、我が國の「神國」なる觀念は不動であり、神國は國民的信念であつた。石淸水文書に觀ゆる寬治四年の白河

上皇の御告文の「仰も本朝は神國なり」或は保延五年鳥羽上皇の御告文の「我朝は神國なり」とか、藤原頼長の「台記」康治元年十一月二十三日の項にみえる「日本は神國なり」或は「吾妻鏡」又は「玉葉」に見える義經腰越狀に「其れ我が國は神國なり、神は非禮をうくべからず」[10]などに於いて觀らるゝ通りである。然しこの神國觀は宗教時代に於ける一種の國體觀であつて、神裔の皇統を繼がせ給ふことを主眼とし或は諸神の我が國土人民を守護し給ふと言ふ意味であつて、勿論かゝる國柄は國土の優秀なるに依つてであるが故であるとも考へらるが、尙國土とは別個の問題として理解されてゐたやうである。

三

中世の國土觀が全く佛教思想の支配下にあり、國民としての誇りも少なく、例へあるにしても佛教を通してのそれであり、甚だ自卑的なものであつて、一種陰鬱なる觀方であつたのに反して、近世に入るに及んで社會の形勢の一變すると共に國土觀も亦著しく變化し、時代の經過と共に自主的となり、明朗となり、近代學問の進歩と共にその國土觀も正確となり、こゝに現代の國土觀の源流をも發見し得るやうになるのである。

中世の末法世界觀に對して社會は次第に進歩發展するものであるとする進歩の思想が現はれて來た。橘守部はその著「神風問答」に於いて[11]

世ノ中ノ衰フルト云フ事、大方今ノ世ノ人ノ口グセナガラ、大ナル僻事ナリ。世ハ衰フル物ニハアラズ。其中ニ時々少シノ盛衰ハアレドモ、ツヒニハ又漸々ニ隆リユクモノ也。故ニ古ヘノ書ニハ、當代ノ事ヲ中今ノ御世ト云ヘリ。中ハ盛ナル意ヲ以テ云ルナリ。心付テ見ルベシ。然ルニ古學者ノ輩、古ヘヲ忍ブ心ヨリ、御當代ノ事ヲ下レル世ナド云メルハ、ヨカラヌ事也云々

又「神代直語」卷中には

此行まも追々に產靈給ひて、いかに貴く成行らんといとたのもし。外國の書に惑ひて、末代なりなど思ふべからず。世ノ中の次第に榮え、次第に足備りゆくなるは、全此三柱の御恩賴にぞある。仰ぐべし、貴むべし。

とあるは明らかに社會は進歩發展するものであるとする樂天的な自然的なる時代觀である。時代觀に於けるかゝる變化は又空間的なる國土に對する考へもコペルニカス的に轉回した。我が國の印度、支那の二國に比して小國なるはかくれ無き事實である。これを隱すことは出來ない。しかしこの小國なることが却つて貴き意味を有するものであると解釋するやうになつた。實に驚く可き變化と謂はねばならぬ。熊澤蕃山は「三輪物語」の卷頭に揚言して曰く。

三國は三光の國也、天竺をば月神のつかさどりまします故に、月氏國といふ。唐は星神の掌りまします故に、震旦といふ。我國は日神のつかさどりまします故に、日本と云。月星は日光の分所也。故に二國は我國の末流也。千界の源、萬國の本は我國也。ことに小國なること、三國のはじめなる證據也、萬物みな、始は小さきもの也といふ。

勿論、かゝる解釋は一種の信仰的解釋であるが、尙既に時代の影響を受けて「小國なること、三國の

はじめなる證據也」の如く一種の自然科學的な說明を加へてゐるのである。更に彼は我が國の美國なる所以を述べて曰つてゐる。

日本は東夷の小國なれども、神國とて國土異に人心通なり(宇佐問答　上卷)

日本は福地なる故に、田畑多く人多し、(集義和書)

東を夷と言、人にかたどれり、四海の內にてすぐれたり。九夷の內にて朝鮮琉球日本すぐれたりとす。三國の內にては又日本をすぐれたりとす、然ば中夏の四海の內には日本に及べき國なし、(同上)

日本は小國にて金銀多し、異國より望むといへども武國故にとり得ず(同上)

彼は尙夷國思想にとらはれてゐるが、これが故はやはりその學問の影響とみるべきであらうが普通の儒者の言ふ夷とは稍異つてゐる。「中朝事實」の著者、山鹿素行も亦我が國を中朝と稱した位であるから優れたる國土觀を持してゐた。「中朝事實」の卷頭に

中國之水土、卓爾於萬邦而人物精秀于八紘

と掲かげ、これを說明して、

我が國は往古より中國と稱した。元來人間は「水土」の影響を受けるもので「平易」の土地に生成したものは平易の氣を受け、その性質も自ら平易である。故に五方の民各性を異にし俗を異にしてゐる。我が國は風雨寒暑共に偏せず、水土も肥沃である、從つて人物も精秀であり洵に中國と稱すべきであると述べてゐる。

更に具體的に我が國土の地理的に優れたるを論述して、本朝の地形東西に長く、南北に短く、四方海洋に廻らされてゐるから、海の保護性に依つて外敵の侵入を受けることはない。故に「浦安國」と言ふのである。物産も甚だ豐富である。又大國の支那に比して我が國は幾多の特色を有するが、國境の劃然としてゐること、四夷に接近してゐないこと、國防を嚴にする必要のないなどの諸點が擧げられる。尙北陰の險を背にし、多數の洲を擁し、河海を利用し、後には絕峭に依つて大洋に望み、何れの洲も運漕の便があり、四海の廣きも一家の如く統一がある。實に天地の正位にある秀れたる國柄であると說明してゐる。これと略同樣のことを「謫居童問」に於いても述べてゐるのであるが、これに依つて具體的な國土觀を有してゐたことが理解されるのである。

國土の正しき認識はその國土のみに就いて考へてゐては得られるものでない。廣く眼を世界に向け、世界の各國の特性を研究し、彼我の比較に依つて初めて正確なる認識が得られるのである。三國を以て世界と考へ、而もその三國の中、天竺、支那の二國が共に文化的には我が國を支配してゐる時代に於いては正しき國土觀は得られないのである。然るに蘭學が開け、新しく西洋の事情が我が國に傳へらるゝに及んで今まで抽象的に、觀念的に、宗敎的に我が國の美國であり、良國であることを理解してゐた人々が、實證的に、具體的に、我が國の他國に卓絕してゐる所由が理解されるやうになつた。この實證的に我が國土を正しく理解したものは長崎の通詞で蘭學に通じてゐた西川如見（求林齋）

であらう。彼は元祿年間に「華夷通商考」「四十二國人物圖說」を著し朧氣ながら世界の大勢や各國の風俗を叙述したのであるが、茲に注目すべきは「水土の方面からして、我が國體と國民性の美に著目し」「比較的に獨斷を免れた、價値ある國家主義」[12]の主張をなした「日本水土考」なるものを著したことである。この書は數片の簡單なるものであるが頗る方法論的にも科學的に取扱はれてゐるのである。先づ、その序文に於いて、論證の科學的根據に就いて述べ、世界各國は各自國を以て「上國」となし、自國に都合の良い說をたてゝ「斷自國之美」てゐるが、これは正當な議論でない。從つて、我が國の美を論ずる場合にも我が國に關して何等偏する所のない他國人の作つた地圖に依つて我が國の水土を論じて始めて眞個の國情が知られるのであるとして、徒らに主觀的に、哲學的に我が國の上國なる所以を論ずることを避け、客觀的に、實證的に論じて妥當な結論が得られるのであると述べてゐる。甚だ敬服すべき態度であると云ふ可きである。

「日本水土考」は白石の「西洋紀聞」に先んずること十年にして世に出たものであるから、その文體も漢文であり、從つて、そこには尙多くの支那的思想の殘影が認められるのであるが

此國在萬國之東頭。而朝陽始照之地。
陽氣發生之最初(中略)主于卯故木德也(中略)
日本東西經度相亙地三十二度。南北有東西四分之一而及地度之三也。北之天竺辰旦則雖謂小島然萬國之間堺內

不如日本者最多。況於偏熱偏寒類耶。傳聞大海中島大者八。其中以日本國爲第一大島。何謂小島哉。或有以爲粟散國者甚不然。夫大地雖廣大。有其里數所極而著明也。今之號世界者其周圍三百六十度而無過於萬五千里。卽以日本東西之經度較計之則莫餘於三十二倍。然則日本亦大國也。豈得號粟散國哉。夫國也者不可以廣大爲貴。以四時之正偏人物之美惡而可定其貴賤。是故國土極大者。其人情風俗多岐而難一統。故雖辰旦聖國也。動有皇統變亂而難久治。雖周之世系經八百餘年。甚間治平純靜者不足三百年。況其以下歷世賢三百年者殆希也。日本之限度不廣亦非狹。其人事風俗民情相齊混一而易治。是故日本皇統自開闢至當今而無變者。萬國中惟日本而已。是亦非水土之神妙耶(肩點筆者)

この他、我が國の要害堅固なることを述べ、浦安の國なる所以を政治地理學的に興味ある筆法を以て說明してゐる。又中世の粟散國觀に反對しては更に「町人囊底拂」卷一に

日本國をもつて佛者は粟散國と言ふ、儒者は中國より開基せし屬國なりとおもへり。今此世界大地世界といふは實に測量の考驗ありて、其周大日本の萬五千里にして甚曠蕩の說にあらず、其內島洲多しといへ共、日本の如なるもの八あり、そのうち日本を第一とす。しからば豈粟散國といふべけんや。(下畧)

と謂つてゐる。

その如何なる人物か未だ明かにされてゐないが、「紅毛天地二圖贅說」の著者北島見信も一家の見を出してゐる。元文二年に出版されたもので、「采覽異言」に後ること二十五年であるが、我が國土に關して「非凡の卓論」を出してゐるのである。西洋諸國が我が「夏國」を Japonia (耶波爾亞) Japon (耶

本）などと稱するが、これは日本の支那音の轉化したものであると述べ、我が國はその地勢上、支那大陸と一緒に亞西亞に分類するは不當である。寧ろ、スマトラ（蘇馬太剌）東印度諸島（和蘭得亞那花）ユーギネア（那花魏企亞）等の地は各地に散在してはゐるが、自ら別れて、一大州をなしてゐる。「地勢非亞西亞所屬最分明也」である。故に新しく儻かに一大洲を置いた方がよい。その洲名として「和兒斯爺禡多」（Fortisjamato）としたがよい。これは我が日本國を中心として各地を之に從屬せしめる意であつて、和兒知斯とは西土雅語で「威德」の意である。彼の圖說は單簡であるから、果して何が故に「威德」日本と稱せらるべきであるか不明であるが、その主張する所よりして、我が國土を以て支那の亞流たらしめざるだけの地勢的價値を認めてゐたのであらうと思はれる。げに新村博士の言葉の如く、鎖國時代としては洵に雄大な思想であり「空谷の跫音以上である」。

西洋思想の洗禮を受けたる西川如見の國土觀を巧妙に取り入れてこゝに嶙然たる國體學を形成し我が國土觀に更に一歩を進めたのが平田篤胤である。彼は「古道大意」下卷に於いて、先づ如見の「日本水土考」を引用して、更に說明して曰く、

イデヤマタ、日本ノ有福ナルコトヲ具ニ云ハバ、マヅ第一ニ、地方ガ殊レテ中正デ、夫ユエ南ナル國々ノヤウニ、暑クテドウニモナラヌト云ヤウナコトハ無ク、又地國極寒ノ、ドウニモナラヌト云ヤウナ寒サモナイト、又是ハ云フニ及バヌ事ジヤガ、諸ノ國々ノ肥澤テ、歡ブベク樂ムベキハ、天ノ度數ニ取テハ、北緯三十度ト、四十

度トノ間ニアル及ハナイ、日本ハチヤウド、夫ニ當テキル。

と緯度的にみて我が國が丁度適當なる位置にあることに注意し、更にその國土が山勝の嶮岨なることを述べ、そのためにはその住民は農耕その他に苦勞をしなければならぬ。苦勞することは心身を訓練することであつてこれが却つて住民には都合がよく、熱帶國のやうに無爲自然では進歩向上がないとしてゐる。

又「日本ノ土地ハ、カシコヤココデチギレテキテ、云ハバ諸ノ島ヲ、寄合セタヤウナ國ジヤガ」之は惡い國ではないかとの反問に答へて、

日本ノ國々ノ離レテキルノハ、譬ヘバ此大地球ノ國々ガ遠クハナレテアルヤウナモノデ、サウ放テキルト、其國々ニ依テ、產物ガ各チガツテ、色々有用ノ物ガ出來ル、夫デ日本一國、トント外國ノ物ヲ望マズトモ濟ヨウニ、

と述べて、各地の物產を擧げ、萬國に優れたる所以を力說してゐるが、これは一種產業地帶論であつて、我が國の如き地域的に廣い（面積的の意にあらず）國柄を地理的に正確に說明したものであると云ふことが出來る。

最後に彼は佛者、儒者、蘭學者のそれ〳〵天竺、支那、西洋にかぶれたものを罵倒して、「佛者ハ、天竺バカリヲ贊テ、彼國ハ佛ノ本國デ、尊イ國ジヤ、我國ハ東方粟散國ト云テ、東方ノ海ヘ、粟粒一ツヲ流シタヤウナ國ジヤナドト云テ騷グ」儒者は彼土を「聖人ノ國」「中華」だとして我が國を「小國」

「夷狄」とし「エビス國」と稱して陋めてゐる。近頃流行のオランダ學問では「ヤミクモニ、西ノ極ナル國々ヲ贔屓シテ」ロシアの如きを例證として我が國の小國なることを地圖に繪圖にして人々を驚かしてゐると宗教的な熱情を以て述べてゐる。云ふ迄もなく彼の説明は甚だ宗教的色彩の濃厚なものがあるのであるが、それを合理的に説明するに地理學的知識を以てしてゐるのである。

篤胤の説を更に發展せしめたのが、佐藤信淵である。彼は「鎔造化育論」に於いて次の如く甚だ實證主義的な議論を述べてゐる。即ち、物産の生育の多少は全く太陽光線に依存することを第一に主張して「夫物産ノ發生スルハ、悉皆日輪ノ光炎ニ係」り「彼ノ歐羅巴ノ諸國ハ赤道ヲ距ルコト、四十度以下ヨリ六十度以上ノ間ニ在ルヲ以テ寒冷物産甚少ク」其の食に不足し、航海し、萬國に通商してゐるのである。反對に熱帶地方では物産極めて豐穰であるために、これらの地では飢寒あることなく、人民繁庶し、富饒を宗として、その長生を貪つて努力しない。然らば我が國は如何と言ふに

皇國ノ土地ハ赤道下ヲ距ルコト三十度ヨリ四十度ノ間ニ係リ、氣候寒熱各半スルヲ以テ北狄ノ如ク荒涼ナラズト雖ドモ南蠻ノ如ク豐熟ナルコト能ハズ、故ニ經濟ノ要道ヲ行ヒ、物産ヲ開キ交易ヲ通シ、財用ヲ豐カニシテ國事ヲ營マザレバ或ハ飢寒ノ患ナキコト能ハズ。

夫皇國ハ萬國ノ根本也、然ルニ物産ノ發育スルコト蓋爾タル蠻境ニ如ザルハ、如何ナル故ゾト疑惑シテ輿地國ニ就テ熟按シテ、始テ其理ヲ會スルコトヲ得タリ(中略)皇國ヲ寒熱ノ中間ニ盤踞セシメ環ラスニ大洋ヲ以シテ萬國ノ後共ニ自在ナラシムルハ四大洲ヲ統治スル皇ノ畿内ナルガ故ナリ、皇國ノ土地ノ寒モ熱モ共ニ酷シカラズ、大

洋中ニ特立スル者ハ、宇内ヲ鞭撻スルノ元資ニシテ世界第一ノ形勝タルコトヲ知ル。

と言つてゐる。こゝにも尙篤胤の殘映をみるのであるが世界的見地に立つて我が國を觀たるものであつて、著しく進歩的な科學的な國土觀であると言ふことが出來る。

宗教的な色彩を脱して、純地理學的に我が國土を正しく認識したのは花井一好の「神州論」である。彼の行動は明瞭でないやうであるが、長崎に在勤したこともある、天保、弘化頃の人物である。該神州論は極めて簡單なものであるが我が國の大體を地理的に說明してゐる。

その大略を示せば、

我が國は上古は葦原の中津國と稱して開天闢地以來、皇統連綿として、東溟に獨立して四隅の華夷自ら入貢せり。國の廣狹を狄夷に比較せば東洋中の一塊嶼たりといへども、四時の風寒、暑濕、燥冷相參て行れ、人畜、草木を造化して、日月、星辰を運轉して晝夜の位を分ち、アジア東洋中の大島にして、赤道線を去る事三十一度にして、陸奥は北に首し、九州西南に尾す。山城中央に居て天府に應ず、北極の出地は大隅、薩摩にて三十四度、奥州津輕にて四十度に及べり。（中略）正帶に屬せる一勝地たり。（中略）國の周圍は滄海にして、要害堅固の土たり。此州に生ずる天工の三富は、一として闕たるなく、（中略）中にて稻米は美良にして五世界中我皇國を最第一とせり（中略）、我が大日本の洲は衣食住の三つも足りて、此餘種々の產物ありて、此各島の生產する所、殆ど全國の用に備るに足れば、實に我が皇國は亞細亞洲東洋中の一大孤島たりといへども、他邦の救を受ずして特立なすは、東海中の富國たらん歟。

以上の諸例に依つても略明かである如く、時代の降るに從つて國土觀も次第に明瞭となり、一好の

「神州論」に至りては略正確な科學的な國土觀であると云ふことが出來る。しかも、これらの正しき國土觀が西洋學術の影響、とりわけ、世界的知識の採擇に依つて將來されたものであり、又、國學の研究の進歩ともに我が國の眞の姿を地理的に、他の言葉を以て云へば實證的に說明せんとして現はれたものであり、我が國の歷史的にも、地理的にも他國に優れたる所以が理解せられてゐたことが知られるのである。かゝる理解は間接的であるとしても、新時代への有力なる原動力となつたものであつて、茲に未曾有の大變轉が實際上に現はれると言ふことになつたのである。

尙、近世に於ける儒學者中には、例へば徂徠の如く、華夷の辨を誤つたものも少なくなかつたが、それらは多く政治的意味に於いてであつて、地理的な實際的な意味に於いてではなかつた。俯して國土の觀察をなしたものは我が國、風土の優秀性に氣付いたのであつた。

これで、我が國土が如何に觀られて來たかの考察を終るのであるが、この小稿は文字通の概觀であつて、資料の不備、考察の不充分は小稿を甚だ物足りないものたらしめてゐる。これ偏へに筆者の菲才の致すところであるが、原稿締切間際に起つた身邊上の雜事のために、益々混雜した統一のとれぬものとなつた。幾重にも御宥恕を乞ふと共に別稿を御約束する次第である。(昭和一一、一一、三〇)

(註) ① 黑板勝美「更訂國史の研究」總說 (昭和六年)
② 平泉澄「中世に於ける精神生活」 (昭和三年)
③ 佐々木八郎「國文學研究」第四輯 平家物語私說 四八頁

④ 佛教大辭彙　第三卷
⑤ 高野辰三「日本歌謠史」（大正十五年）三九五頁
「國文東方佛教叢書」歌謠の部
⑥ 藤田元春「日本地理學史」（昭和七年）四八頁
⑦ 栗田元次「日本古版地圖集成」（昭和七年）說明の部
⑧ 野村八良「武家時代文學に現はれたる日本精神」（昭和九年）六八―六九頁
⑨ 辻善之助「增訂海外交通史話」（昭和五年）三二一頁
⑩ 平泉澄「中世に於ける國體觀念」（岩波講座）（昭和八年）四六頁
⑪ 河野省三「國學の研究」（昭和九年）一七頁
⑫ 前揭書　三三八―三三九頁
⑬ 新村出「藝文」第六年第十一號「圖書館の一隅より」